

# 朝鮮産甲殻十脚類の研究

## 第二報 ヤドカリ類 (その五)

上 田 常 一

(昭和32年11月1日受理)

Tsuneichi KAMITA: Studies on the Decapod Crustaceans of Corea,  
Part II, Hermit-Crabs (5)

朝鮮産カニダマン科3属の検索表(補遺)

前回(その四)の p. 99 のところで、この検索表が、AA の項で尻切れになつているから、次の検索を加える。

B. 鰓室の外側面に位する側甲、すなわち、肢上部は分節せず、尾鰭は7節から成る。

..... *Petrolisthes* カニダマン属

BB. 鰓室外側面の肢上部は、前後の大小2片に分れ、両片は膜質で結合し、尾鰭は5節から成る。..... *Pachycheles* カニモドキ属

Genus *Upogebia* LEACH 1814 アナジャコ属

29. *Upogebia major* (DE HAAN) アナジャコ

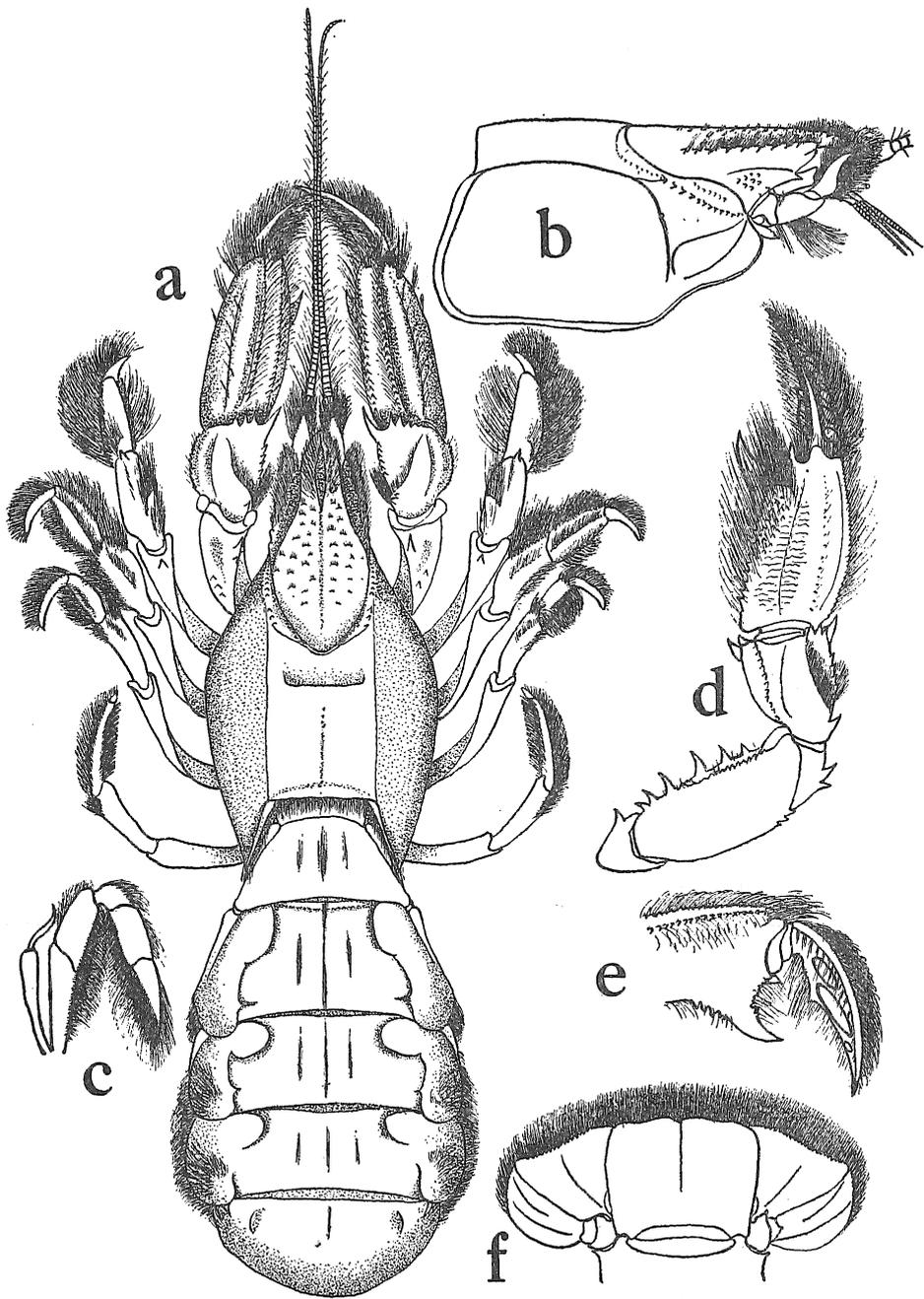
*Gebia major* DE HAAN 1849, Faun. Japon., Crust., p. 165, Tab. XXV, Fig. 7; MIERS 1879, p. 52; ORTMANN 1892, p. 54, Taf. 1, Fig. 7; DOFLEIN 1902, p. 643; YOKOYA 1930, p. 543, text-fig. 4.

Localities:

Corean Strait side—Masan, 3 ♀ ♀ (1 ovig.), 4 ♂ ♂; 29/VII/1936; Mr. T. SATÔ. Okayama-mura near Tôei; 3 ♀ ♀ (2 ovig.), 3 ♂ ♂; 3/VIII/1943; writer. Numerous specimens owned by the Reisui Fisheries School.

Yellow Sea side—Numerous sps. owned by the Fisheries Experimental Station of Keiki-dô. Kinzanpo, Kôkai-dô; 2 ♀ ♀, 4 ♂ ♂; 13/VIII/1935; Mr. T. SATÔ. Numerous sps. owned by the Fisheries Experimental Station of Heian-hokudô.

本種は早く SIEBOLD 氏の日本動物誌に記載され、俗にカマシヤコとかシヤコと呼ばれる。頭胸甲は三角形、側甲は強く下方に垂れる。額角は突出三叉、後方に深い2溝があり、中央突起は大きく三角形で正中に浅い溝がある。額角背面は疣で被い、疣上に毛を束生する。左右の肝臓は甲殻を透して青黒く眼状紋をなす。腹部は長く発達、第1節は小、第2~5節は側甲発達、ここに湾曲線と軟毛を密生。第6節は背面曲線のみ。鋏脚は左右同形同大、腕節は前端内



Text-fig. 45.

*Upogebia major* (DE HAAN): a, ♂ from Kinzanpo; b, cephalo-thorax;  
c, 3rd maxilliped; d, left cheliped; e, innerview of chella; f, tail fan.

a~c,  $\times 2.5$ , d~f,  $\times 3$

アナジャコ

縁の2棘と多くの小棘によつて縁付けられ、背面に2溝前端で合す。前節は指節より僅に長く背面に2条の齒列と2条の縦溝を有し、外側面に齒群を付し、下面に齒列がある。指節と向い缺を成す前節突起はきわめて小。指節は♀♂によつて形状を異にし、♂は斜に列ぶ10疣と内面に3疣を裝い、♀はその位置に(ルーペによる)秤の目の如き欠刻を有す。腹肢は第2~5対は扁平同形、外枝は内枝の4倍、第1肢は♀のみ有し、棍棒状。

生態：最干潮線内4~60mの砂泥地に、5寸~1尺2・3寸の小孔を穿つてすむ。来潮に会つて、孔口に出て堅固な外顎脚で餌を求め。生時の色彩は統営近海のものでは、♂は赤色を♀は青色を帯ぶ。頭胸部に往々エビヤドリムシが寄生。夏季抱卵、卵は黄綠色。

朝鮮における分布：南は慶尚南道から西は平安北道に及ぶ。BALSS氏は1913年ウラジボストックから *Upogebia Issaeffi* (BALSS) を記載したから、それが咸鏡北道でも見つかるかもしれない。今泉力蔵氏は、咸北明川郡高村屯から化石種 *U. oishii* を記載したが、それは缺の掌節の内側に明に顆粒を有するという。

人生との関係：釣魚の餌料で、タイの一本釣に最も多く用いられ、赤色を帯ぶるものがつきがよい。青色を帯ぶるものは適しないと。

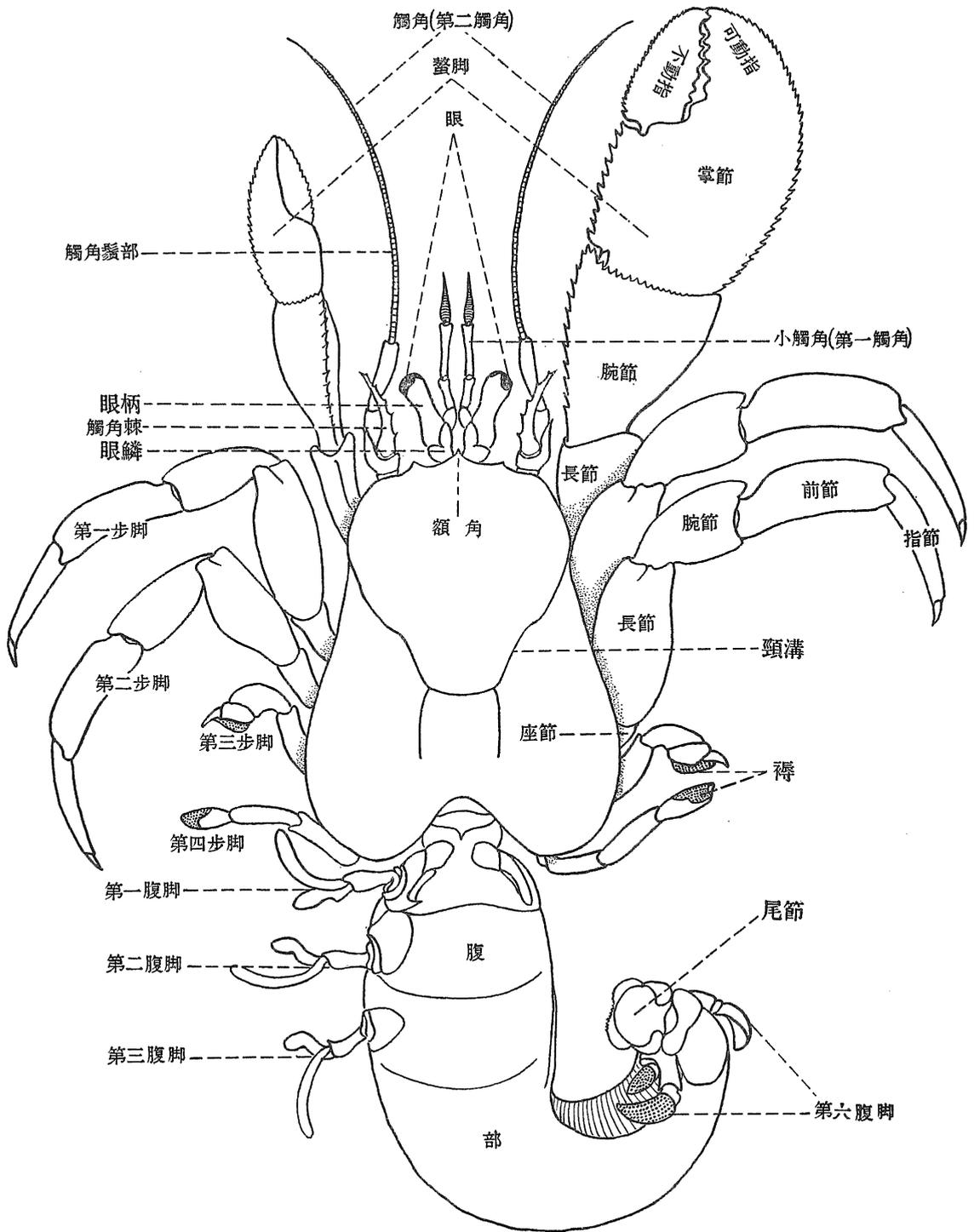
### 補正及び補遺

1. 筆者の未同定であつた、*Eupagurus* sp. コウライヤドカリ(仮称)と、?*Lepidopa* sp. トゲクダヒゲガニ(仮称)について、九州大学農学部三宅貞祥教授から、種名を教えられた。すなわち、前者は *Eupagurus similis* ORTMANN, 1892 で、後者は *Blepharipoda liberata* SHEN, 1949<sup>\*</sup> である。なお、三宅教授は、ORTMANN氏が、*Eupagurus japonicus* だと説明している原図(1892, Taf. 12, Fig. 16)には、*similis* のものと *japonicus* のものとが混在していると思う、と教えられた。筆者のみなおしたところでは、図の16は *japonicus* のもので、16kと16mの2つは *similis* のものようである。

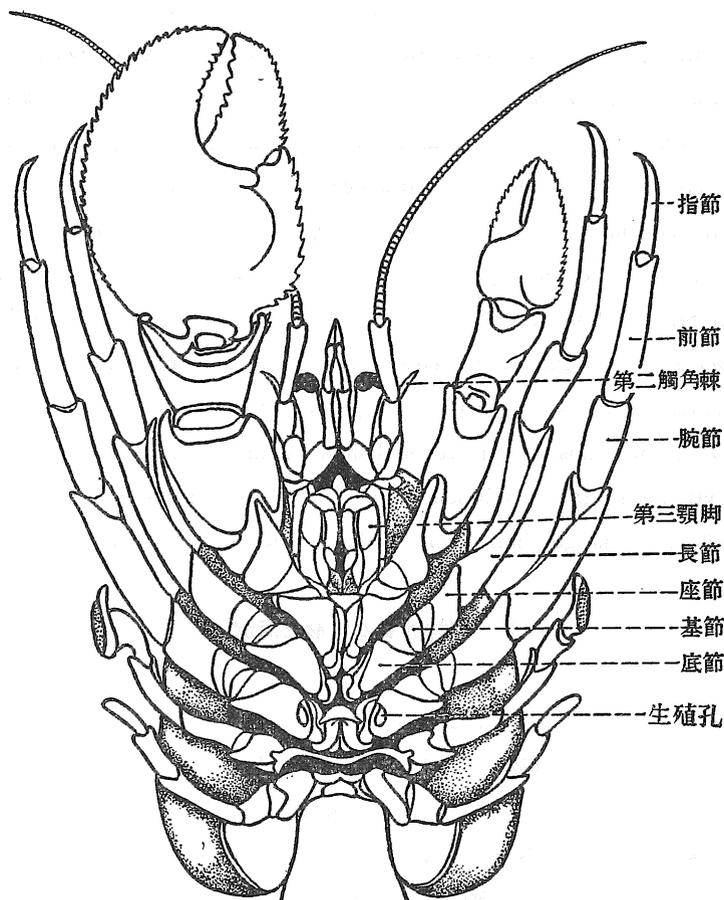
2. クダヒゲガニ属の学名 *Lophomastix* のスペルは、*Lophomastix brevirostris* URITA, 1934 にならつたものであるが、三宅教授の教えによれば、*Lophomastix* が正しいので、*r* は余分であるという。

3. ヤドカリの体制術語の図解

\* SHEN, C. J. 1949: Notes of *Blepharipoda* and *Lophomastix* of the family Albuneidae (Crustacea, Anomura) with description of a new species *B. liberata* from China. Cont. Inst. Zool. Nat. Acad. Peiping, Vol. 5, pp. 153-170.



Text-fig. 46. Dorsal view of a hermit-crab, showing the terms used in description.



Text-fig. 47. Ventral view of a hermit-crab, showing the terms used in description.

#### 四・朝鮮のヤドカリ類の地理的分布

As to the geographical distribution of the Anomura in Corea, Paguridea and Galatheidea are interesting to examine. By this time 2 families 7 genera 16 species of the former and 2 families 5 genera 6 species of the latter, are collected by the writer and the predecessors. The fauna of Paguridea may be divided into 3 groups, the first group is the species distributing in the southern districts and it seems to be rather simple: *Pagurus arrosor*, *Pagurus impressus*. They are only distributed in the Korean Strait where the warm current is running. The second group is the species in the northern parts: *Eupagurus middendorffii*, *E. ochotensis*, *E. pectinatus*, *E. pubescens*, *Paralithodes camtschatica* and *P. platypus* are the representatives of this group, and these are mostly distributed in the Japan Sea side. It may be presumable that the cold

current from the Amur coast flows along the east coast of Corea, and brings with it these species. The third group is the species rich in the proper East Asia: *Diogenes edwardsii*, *Paguristes digitalis*, *Pagurus kagoshimensis*, *Eupagurus conformis*, *E. constans*, *E. dubius*, *E. japonicus*, *E. sp.* (= *E. similis*), *Hapalogaster dentatus* and *Oedignathus inermis*. They belong to this group. The fauna of Galatheidea can be divided into 2 groups and there is no northern distributing species. *Munida japonica japonica*, *Petrolisthes japonicus*, *Porcellana serratifrons* are the representatives of the group, which are mostly distributed in the Korean Strait. The other group is the proper East Asian species. *Galathea orientalis*, *Munida scabra* and *Pachycheles stevensii* are of them. The fauna of Paguridae has many northern species, especially the proper East Asian species in comparison with the fauna of the crabs which are published by the writer in 1941. It is presumable that this peculiar distribution is based upon the hermit-crab's habit: they live in the gastropod shells and change their living shells as they are growing.

#### I. 朝鮮近海の地形と海況

朝鮮半島はアジア大陸に接続し、陸棲動物分布上では旧北区に属し、咸鏡道と平安北道にまたがる蓋馬高台を除く他の地方は、日本の本州・四国・九州と共に支那亜区に属し、蓋馬高台地方は北海道・樺太と共にシベリヤ亜区に属す。東側は深さ 1,000 m 以上最深 4,000 m 広さ 30万平方哩の日本海に面し、日本海は間宮・宗谷・津軽の 3 海峡を介してオホーツク海・ベーリング海および北太平洋に連る。西側は深さ 100 m 未満の浅海黄海に面し、黄海の南は東支那海に、西北はぼっ海湾および遼東湾に連る。南は 200 m 未満の朝鮮海峡、140 m 未満の対馬海峡、最深 60 m 余の峯岐海峡を隔てて九州と相對す。この対馬の東西両水道の断面積は 3 平方哩余。もしそれ、日本海・対馬東西両水道・黄海にわたる海水面が現在よりも 200 m 隆起したならば、朝鮮半島と日本諸島とはおおむね陸続きとなり、オホーツク海は湖となり、黄海・ぼっ海湾・東支那海は一大平原化するであろう。そして、日本海は暖流の流入をさえぎられて水温は著しく寒冷となるであろう。

オホーツク海の北西部に源するリマン寒流は、間宮海峡から日本海に入り、ソ連沿海州の沿岸を洗い、ウラジオ沖合からさらに北鮮沿岸を南下し、江原道南部<sup>\*</sup>に達す。慶北からは下層流となつて朝鮮海峡に入り、表面に出てこない。つぎに、遠く太平洋北赤道海流に源する日本海暖流(黒潮)は、台湾の東岸に沿うて北上し、台湾と先島諸島との間から方向を北東に転じて表日本の沿岸を洗うが、その 1 支流は沖なわ諸島の西からわかれて九州西岸に沿うて北上し、いわゆる対馬海流となつて日本海に入る。入るに先だち、対馬の南端に激しくぶつかつて大小

\* 江原道南部は北緯 37.5° に位する三陟まではイチジクが実のり水田の二毛作がきく。

2つに岐れ、主流は対馬海峡を進み支流は朝鮮海峡に出る。前者はそれより裏日本に沿うて水深はぼ 100 m のところを東北へ進み、途中1枝を津軽海峡に出してから、方向を北々東ととつて北海道の西岸を洗い、宗谷海峡に入つてオホーツク海に消えるが、その1小枝は樺太の西岸を過ぎて間宮海峡に終る。朝鮮海峡(対馬西水道)に入つた支流は、半島の南東端を左に廻り東岸に沿うて表層流をなして北上する。この北上流の1小枝は、一般には迎日湾から右折して東に向い、その1小小枝はさらに右折して、裏日本を北東に向いつつある、先の主流に合する。北上流はよく威南沖合に達し、時に威北沖合さらに遠くウラジオ沖合にまで達することがある。しかし、冬季では萎縮して江原道竹辺とうつ陵島間、あるいはそれより少し北の注文津の沖合まで、すなわち緯度にしてはぼ  $37^{\circ}\sim 38^{\circ}$  の間までしかとどかない。黄海の海流についてはその系統がまだ充分明になつていないようだが、九州の西海を北上する暖流の1枝五島済州島海流が済州島沖合から半島の西岸に沿うて北上し、黄海道の西南端に到り、それから方向を西北西に転じてぼっ海湾に入る。その勢力は微弱なもので、済州島沿海は別として、全南の南西部の沿海は江原道南部の沿海よりも、暖流の高温濃塩分のえいきようははるかに少いとされている。半島の黄海側における寒流のえいきようはないが、ぼっ海湾に源を發する1小寒流は支那山東高角(半島)の北岸に沿うて東進し、角端から南向流となつて支那の東岸を洗い、そしてこの寒流の沖合には暖流の北上流がある。

日本海側における潮汐干満の差は甚だ少く、例えば雄基 0.5 m, 城津 0.5 m, 元山 0.6 m, 注文津 0.4 m, 迎日湾 0.2 m である。朝鮮海峡側にあつては釜山 1.4, 統営 2.9, 三千浦 3.4, 麗水 3.7, 莞島 3.9, 木浦 3.9 m である。黄海側にあつては群山 7.3, 仁川 9.7, 鎮南浦 5.9 m である。故に、西海岸および南海岸では、干潮時には広漠たる干潟をあらわし、干潮満潮前後には、海底面は潮流によつて絶えず攪乱され、それにこの方面に開口する諸大河の吐き続ける泥土も加つて、海水はいつも混濁する。まさに黄海そのものである。

## II. ヤドカリ亜族 PAGURIDEA の分布

これまでの調査からすれば、半島近海のヤドカリ科 Paguridae には次の3亜科14種が採集されている。ヤドカリ亜科 Pagurinae—*Pagurus arrosor*, *P. impressus*, *Diogenes edwardsii*, メナガヤドカリ亜科 Paguristinae—*Paguristes digitalis*, *P. kagoshimensis*, 真ヤドカリ亜科 Eupagurinae—*Eupagurus constans*, *E. conformis*, *E. dubius*, *E. japonicus*, *E. sp.* (= *E. similis*), *E. middendorffii*, *E. ochotensis*, *E. pectinatus*, *E. pubescens*. これらの材料は、主として沿岸の比較的浅所で漁夫の手操網・打瀬網に偶然入つたもの、沖合で機船底曳網にかかつたもの、麗水・統営などの魚市場で魚類と混つていたもの、海底で海女の捕えたもの、海水浴場で生徒が見つけて採集したものなどである。

1) 朝鮮のヤドカリ類がカニ類に比して種数が甚だ少く、南方系の種にとぼしいことは、地理的分布上、まず第1に注目すべきことである。上述の14種の中、*Pagurus arrosor* ヨコミ

ゾヤドカリと *Eupagurus impressus* イボアシヤドカリの2種は南方系のもので、前者はまた世界的に広く分布するもので、西南太平洋から紅海に及び、大西洋はアフリカの西側から中央および南アメリカの東側に及ぶ。南方分子が僅ではあるが朝鮮海峡に分布するのは、ここに対馬暖流の1枝が入りこむからであろう。そして、これらが朝鮮半島の日本海側にも黄海側にも見出されておらないのは、そこらは暖流のえいきようが少いからであろう。筆者がさきに(1941)公表した朝鮮のカニ類は121種にして、このうちに南方系のもものが21種あつた。東京水産試験場の蒼鷹丸が1923~1930年に日本近海の大陸棚から採集したヤドカリは、横屋猷氏によれば46種あり、このうち南方系のもものは8種<sup>\*</sup>で、さらに日本海に分布するものは、*Paguristes barbatus*, *P. stenosus*, *Pagurus arrosor*, *P. impressus*, *Spiropagurus spiriger* の5種である。菊池勘左衛門氏が富山湾から報じたヤドカリは5種<sup>\*\*</sup>で、このうち南方系のもものは *Aniculus aniculus* オニヤドカリと *Spiropagurus spiriger* アシボソヤドカリの2種である。これらの採集品の重複を除いて整理すると、南方系の6種が日本海に進入していることになる。こうしたヤドカリ類の分布のさまたげをなすものは、水温の外彼らの習性にあると考えられる。ヤドカリが岩礁や海底をはい歩くことは、カニと同じでも、彼らが小さい時から常に重い巻貝を引きずつて歩かなければならないことは、自らその移動範囲を制限することになるだろう。また、成長に伴つて脱皮することもカニと同じであるが、彼らはその度に、大きな宿貝を探し当てて、とり替えなければならない。その宿貝のない所へはゆけないので、この面からも、移動範囲はせばまるであろう。それだから、高等十脚類の地理的分布を論ずる場合、カニはエビよりも、ヤドカリはカニよりも、その価値がいつそう高く評価されてよいだろう。

2) 朝鮮のヤドカリ類には寒海性のものが多い。半島の東側には、オホーツク海・ベーリング海などを郷土とする北方系のヤドカリがさうとう分布する。14種中 *Eupagurus middendorffii* テナガヤドカリ, *E. ochotensis* ホクカイヤドカリ, *E. pectinatus* クシヤドカリ, *E. pubescens* ミツカドヤドカリの4種(28%)がそれである。カニでは121種中8種(7%)が寒海性である。これは半島の東側を流下するリマン寒流が招来するものであろうが、この海流は朝鮮海峡の下層にまでおよんでいるから、そこではクシヤドカリがすんでいる。なお、半島の西側黄海にも寒海性のホクカイヤドカリ・クシヤドカリが分布するが、これは黄海に寒冷な水がたたえられているからであろう。黄海は前に述べたように、一帯に浅海で最深100m未満、そのうえ暖流の力は甚だ弱いから、冬になると水温がひどく下つて、魚族は南下して朝鮮海峡およびその付近で越冬する。寒海性のヤドカリがすべて *Eupagurus* 属で、しかも *E. middendorffii* を除くと、いずれも大形種であることは注目に値する。本属は地球上ほとんどすべての海洋に産するけれども、その種数を最も多く産し、かつ個体の体形の大きいものを産するのは北半球の寒海である、といった ALCOCK 氏の概評が当たっているようである。そして、

\* *Paguristes pusillus*, *P. barbatus*, *P. setosus*, *Pagurus arrosor*, *P. impressus*, *Aniculus aniculus*, *Parapagurus pilosimanus*, *Spiropagurus spiriger*.

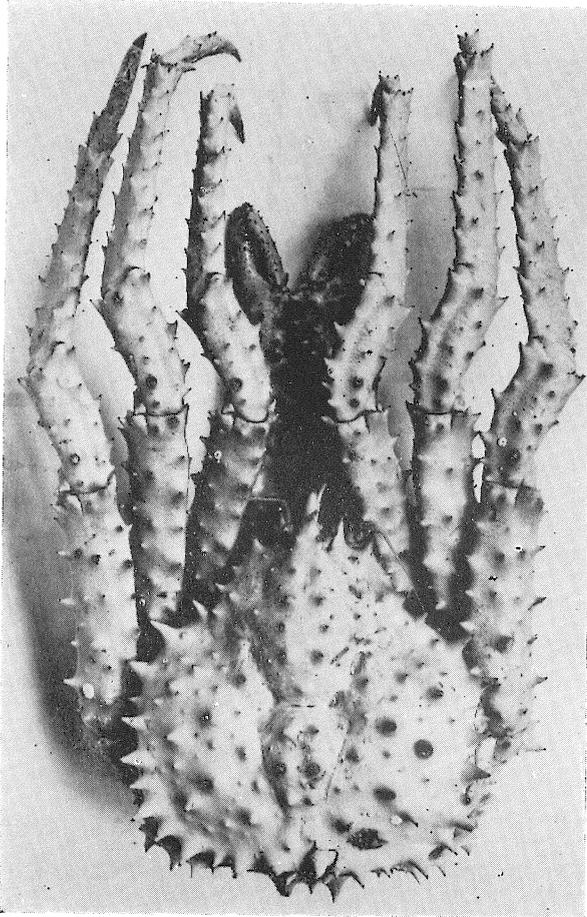
\*\* *Aniculus aniculus*, *Pagurus brachiomastus*, *P. japonicus*, *P. trigonocheirus*, *Spiropagurus spiriger*.

かくも分布のにぎやかな理由の1つとして、おそらく、この海域には、彼らが棲家としてせせこましくない、運ぶに過重でない。探すにむつかしくないところの、巻貝殻や海綿が豊富にあるためではあるまいか。

3) 朝鮮のヤドカリ類には、極東固有種も多い。14種中 *Diogenes edwardsii* トゲツノヤドカリ, *Paguristes digitalis* メナガヤドカリ, *Pagurus kagoshimensis* カゴシマヤドカリ, *Eupagurus conformis* ナラビヤドカリ, *E. constans* イガグリヤドカリ, *E. dubius* ギホクカイヤドカリ, *E. japonicus* ヤマトヤドカリ, *E. sp.* (= *E. similis*) コウライヤドカリの8種 (57%) は、日本と支那近海を郷土としてすむ極東固有種である。カニでは121種中57種 (47%) がそれである。蒼鷹丸は対馬の南東あるいは南から *Paguristes palithophilus* や *Eupagurus conformis* を、鳥取県沖合から *E. triserratus* の如き東亜固有種をも採集したから、半島近海精査のうへは若干種数を加えるであろう。ここでヤドカリの棲家について、さらに一言しよう。筆者の調査によると、ヨコミゾヤドカリはヤツシロガイに、トゲツノヤドカリはツメタガイにギホクカイヤドカリはエゾタマガイに、ヤマトヤドカリとコウライヤドカリはサザエに、といったように定めた空貝に宿っているようであり、また、イガグリヤドカリはイガグリガイの擬殻に、クシヤドカリはある種のカイメンの中にすんでいる。大きくて手近にある空殻であればなんでもよいといったような融通性を持たぬことは、彼らの分布上の障害とならざるをえないだろう。

これを要するに、朝鮮近海のヤドカリの分布は、まだ採集が行きとどいていないだけに、直ちに結論を下すわけにはいかないが、今までの資料によつてあえていうならば、半島近海のヤドカリは3亜科14種にして、極東固有種と北方から招来された寒海性のものが主となり、それに、もともと南方から北上したところの僅数の熱帯性分子が加つている。寒海性のもは専ら *Eupagurus* 属である。筆者が先に公表した朝鮮のカニ類の分布に比べて著しく目につくことは、ヤドカリでは、種数が甚だ少いうえに、熱帯性分子がとぼしくて、極東分子や寒海性分子の甚だ多いことである。こうした分布の特殊性の成因は、他の動物の場合と同じく複雑で、単に海流とか水温とかいつたようなありふれた要素のほか、ヤドカリ自身の習性の複雑さや地史的原因などが関係しているだろうと、筆者は考える。

次に Lithodidae タラバガニ科の分布について述べよう。朝鮮近海には次の2亜科4種がある。Hapalogastrinae—ショウジョウガニ亜科—*Hapalogaster dentatus* イボトゲガニ, *Oedignathus inermis* イボガニ, Lithodinae タラバガニ亜科—*Paralithodes camtschatica* タラバガニ, *P. platypus* アオタラバガニ。イボガニとイボトゲガニは半島近海に広く分布するに反し、タラバガニとアオタラバガニは半島の東側日本海にのみ見出される。タラバガニが朝鮮海峡でとれたという1資料がある。標本は全羅北道全州の元道立師範学校付属国民学校にあつたので、筆者も実際みてきたのであるが、甲長140 mm (崔鳳弔氏測定) 完全なものであつた。標本製作者は、当時全州師範の只野教諭で、昭和5年(1930)1月全羅南道莞島で捕れたもので、たいへん珍しいものだというて、韓国人が売りにきたものを、1月17日に買ったの



Text-fig. 46.

Pagurid crab, *Parolithodes camtschatica*, fished  
in Korean Strait.

全羅南道莞島で捕れたというタラバガニ

であつた。日本側の分布の南限は山口県であるが、普通には（産業的には）島根県とされている。山口・島根・鳥取県沿海では2～3月ごろ手操網で120～200ピロの深所から揚がる。アオタラバはタラバより個体数がずつと少く、また北方にとどまり、タラバの如く遠く南下することもない。イボトゲガニは朝鮮や日本近海にのみ分布するが、イボガニは遠くアラスカやカルフォルニアにわたつて広く分布するところをみると、寒海性動物で、黄海側では、ずつと沖の方に位する島でないとすまない。タラバやアオタラバはイボガニより寒海性の強いものであることは、もとより黄海にはすまないで、半島のリマン寒流の分布と平行し、その密度が寒流の盛衰にともなつて増減される事実が証明する。

### III. カニエビモドキ亜族

#### GALATHEIDEA の分布

半島近海には、次の2科6種がある。ヤドカリ類と同じように採集不行届である。Galathei-  
dae エビモドキ科——*Galathea orientalis* トウヨウエビモドキ, *Munida japonica* ヤマトエビ  
カニ, *M. scabra* トゲエビカニ, Porcellanidae カニダマン科——*Pachycheles stevensii* カニ  
モドキ, *Petrolisthes japonicus* カニダマン, *Porcellana serratifrons* カニマガイ。前述ヤド  
カリ類の分布に比して著しく眼につく点は、本亜族にはもともと暖流によつて招来されたと思  
われる南方系分子の多いことである。すなわち、ヤマトエビカニ, カニダマン, カニマガイは  
西南太平洋に広く分布する。北太平洋の寒海にすんでいるもので、リマン寒流に沿つて南下し  
たと考えられるものはまだ見当らない。トウヨウエビモドキ, トゲエビカニ, カニモドキは日  
本から支那近海を郷土とする極東固有種である。

朝鮮産ヤドカリ類の地理的分布表

Distribution	Formosa	China		Corea			Kjusyu	Honsyu & Sikoku		Yezo	Sagalien	The others
		South China	North China	Yellow Sea	Corean Strait	Japan Sea		Japan Sea	Pacific Ocean			
<i>Pagurus arrosor</i> ケスジヤドカリ					+		+	+	+			太平洋—フィリッピン島, オーストラリア; 紅海; 大 西洋—セントヘレナ島, マ デイラ諸島, カジス, 西イ ンド諸島, ブラジル
<i>P. impressus</i> イボアシヤドカリ					+		+		+			セイロン島
<i>Diogenes edwardsii</i> トゲツノヤドカリ		+		+	+		+	+	+			
<i>Paguristes digitalis</i> メナガヤドカリ					+		+		+	+		
<i>P. kagoshimensis</i> カゴシマヤドカリ					+		+		+			
<i>Eupagurus constans</i> イガグリヤドカリ					+		+		+	+		
<i>E. conformis</i> ナラビヤドカリ					+		+		+			
<i>E. dubius</i> ギホクカイヤドカリ				+	+		+		+			
<i>E. japonicus</i> ヤマトヤドカリ					+			+	+			
<i>E. similis</i> コウライヤドカリ					+	+	+	+				
<i>E. middendorffii</i> テナガヤドカリ						+			+	+	+	ウラジボストック, オホー ツク海, カムチャッカ, 加 奈陀, シトカ, 北米ビュウ ジェットサウンド
<i>E. ochotensis</i> ホクカイヤドカリ				+		+	+	+	+	+	+	ウラジボストック, オホー ツク海, バンクーバー島, 北米サンジェゴ
<i>E. pectinatus</i> クシヤドカリ				+	+	+		+	+	+	+	ウラジボストック, カスト リ湾
<i>E. pubescens</i> ミツカドヤドカリ					+			+	+	+	+	ソ連沿海州, オホーツク海 カムチャッカ, ベーリング 海, アラスカ, カリフォル ニヤ
<i>Hapalogaster dentatus</i> イボトゲガニ					+	+	+	+	+	+		ウラジボストック
<i>Oedignathus inermis</i> イボガニ				+	+	+		+	+	+		ソ連沿海州, アラスカ, カ リフォルニヤ
<i>Paralithodes camtschatica</i> タラバガニ					+	+		+		+	+	ベーリング海, ベーリング 海峡, アラスカ, 加奈陀ク インシャーロット島
<i>P. platypus</i> アオタラバガニ						+				+	+	ウラジボストック, オホー ツク海, カムチャッカ, ア ラスカ

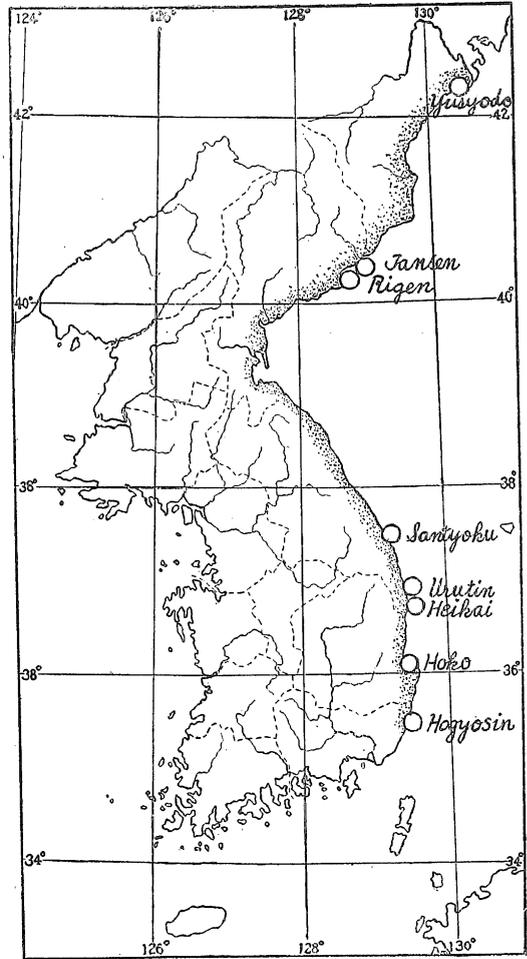


わたり3～5里の沖合 60～100 ぴろの辺で漁獲する。江原——毎年12月～翌年4月(最も多いのは1～2月), 三陟・平海・蔚珍3郡の6～7湮沖合70～80 ぴろの所で漁獲する。咸南——毎年7～8月ごろ, 利原郡・端川郡の3～4湮沖合10～40 ぴろの所で漁獲する。咸北——毎年冬期は陰曆11月初旬～12月初旬, 春期は2月20日～4月10日ごろ, 慶興郡雄尚洞および晩項の沖合で漁獲する。

「朝鮮漁業保護取締規則」の第5条で, タラバガニの採捕禁止期間を次の通り制定した。咸北——5月1日～10月末日, 咸南——5月1日～10月末日, 江原——5月16日～10月15日, 慶北——5月16日～10月15日。なお, 同規則第6条で, 背甲の長さ(背甲の最長部の直径)12 cm 以下のものの採捕を禁止した。

漁場南下の著例として, 慶北迎日湾以北の昭和18年度(とくに2月中)の漁獲高はすばらしく, 筆者が同年3月浦項の慶北水産試験場を訪ねてメモしてきたものは下表の通りで, 近年希な豊漁であつた。

戦争下, 総督府は水産食料確保の立場から, 昭和4年発布の「朝鮮漁業取締規則」



Text-fig. 47.

Fishery bases of Tarabagani, *Paralithodes camtschatica*, in Korea about 1912.  
明治45年ごろのタラバガニ漁業の根拠地

根拠地	漁具	漁獲高		漁船数	漁獲日数	10メ価額 (円)	1匹重量 (匁)
		重量(メ)	価額(円)				
甘浦	機底	27,440	58,991	7	84	21.50	470
良浦	延繩	560	1,288	3	8	23.00	500
迎日	機底	29,871	62,399	11	8	20.00	300
江口	機底	81,470	177,209	8	176	22.00	—
盈徳	帆撃繰	2,773	5,128	27	15	18.50	300
寧海	刺網	2,000	3,600	20	300	18.00	200
丑山	機底	13,885	29,257	5	15	20.00	270
計		157,999	337,872	81	606		

を、19年8月22日付で改め、タラバガニの如きは、♂はもとより抱卵抱子せる♀までも通年漁獲できるようにした。ただし甲長12cm以下の幼蟹の採捕はやはり禁止した。昭和19年11月1日総督府情報課発行の、「通報第174号には」次のように言つた。「ケガニ、ズワイガニ、タラバガニの制限を撤回したのは少し変つた理由によるものである。これらの蟹は従前欧米向輸出罐詰の原料として重きをなしていたものであるが、今日は輸出は勿論罐詰にさえ出来ぬのみならず、第一漁業そのものがやはり資材の関係で非常にやりにくくなつたので制限存置の意義を失つたのである。また改正前はケガニの禁漁期中に明太魚を目的とした機船底曳網にケガニが混獲され、そのため明太魚の漁獲能率に大きな影響を及ぼしていたからであつた。」

## II. ヤドカリ

朝鮮海峡の欲知島老大里の老船頭が、筆者に語つた奇説を紹介しよう。ヤドカリがサザエの前に出て、殻を出てこいと招く。サザエはだまされているとは気づかず殻を出す。すると、ヤドカリは、直ちにサザエの殻に入り、あわててひきかえすサザエを食べてしまうというのである。海女はサザエとまちがえて捕ることがあり、上舟したおりに焚火して暖をとりながら、サザエと共に焼いて食べた。ヤドカリを無傷に殻から取り出すには、先ず殻頂をたたきおとすが良い。すると、彼の柔い尾部がのぞくから、それをマッチの軸木のようなものでつついてやると彼は驚いて殻からはい出る。尾部は敏感である。

## III. アナジャコ

餌料アナジャコについて最もくわしい文献は、大正7年(1918)3月釜山の朝鮮水産組合から、朝鮮水産組合報付録として発行した四六倍判の「餌料調査報告」で、この中(pp. 38-48)にアナジャコの1, 分布2, 生産地3, 採取方法4, 採取期・産額及価格5, 需給の状況6, 用途7, 蓄養法など広く詳細に記してある。

アナジャコは異種のカマシヤコと区別するによい名前であるが、海岸地方では単にシヤコと呼び、朝鮮語でソックと言う。慶南から全南をまわり、全北・忠南・京畿・黄海・平南・平北に至る全沿岸に分布し、西鮮よりも南鮮に多い。一般に砂泥地で、満潮時は浸水するが干潮時は全く露出するような場所にすむ。しかし、干潟地全面にはわたらないで両潮線間の手前の部分である。かような場所であれば、表面は細礫で被われていても、底が砂泥である。孔は深さ5寸~1尺2・3寸の縦坑式のもので、ゴカイやトビハゼのように分岐してないようである。かつて慶南統営岡山村の海岸で、朝鮮の女兒が2匹の罎を使つて巧に捕るところを見た。罎は健全なアナジャコで♂を使う。♂は体が淡赤色であるが♀は青色を帯びるから容易に識別する。腹部の前方細まつたところを1尺ばかりの線維で結ぶ。線維はワラの先を抜いて水につけておきこれを2つに裂いたまでのものである。糸と異つて、結んだ後々までもよく張つて、取扱いに便利である。罎は2匹用意する。時は干潮で場所は波打際の直ぐ手前で、女兒は先ずアワビの貝殻を持つて手のとどく範囲の表土を手早くかき除ける。そこで、小孔口が無数に出てくるから、2つの罎を別々の孔にさし向ける。罎は孔内に入ると、宿主とかみ合い後ずさりになるから、線維を徐々に引く。宿主は罎とかみ合つたまま出るから、孔口の所です早くおや指と人

さし指とで鉋脚をつまみ捕る。ここの要領がまずいと、シャコは罟と離れて元の孔に落ちてしまう。成功すると、罟を再び別孔に追いこみ、他の罟を引きあげるから、見ていても忙しそうである。こうして幾度も幾度も使っているうちに、罟は勢力が次第に衰えるから、別の元気なシャコにとりかえる。波打際には小籠をつけておき、サパールに捕ったシャコはこの中に入れて生かしておく。

平北鉄山郡登串で、当時の道立水産試験場長鄭文基氏から、そこらでやつているアナジャコの捕り方を聞いたことがある。試験場の周囲では、干潮時に表土を2・3寸かき除け、麻がらを孔に立てる。麻がらとは、麻を蒸して皮をはいだ後の、白くて軽い茎なのである。宿主がいると麻がらが動く。そこでこれをぬき、その代りに予め作つてある毛筆様のものをさしこむ。シャコはその毛を挟むから、徐々に引き上げ、出口の所です早くつかむ。統営沖の欲知島の属島老大里では、筆者の見たところ、干潮時に棲息場の砂をかき除けて孔を出し、孔の中にエノコログサ(*Setaria*)の穂をさしこみ、これを徐々にまわしていると、シャコはこれにかみつくから、徐々に引きあげ孔の出口にきた時に、す早く鉋脚をつかむ。味噌を水にとかして孔の上にかけておくと、よくとれるというていた。

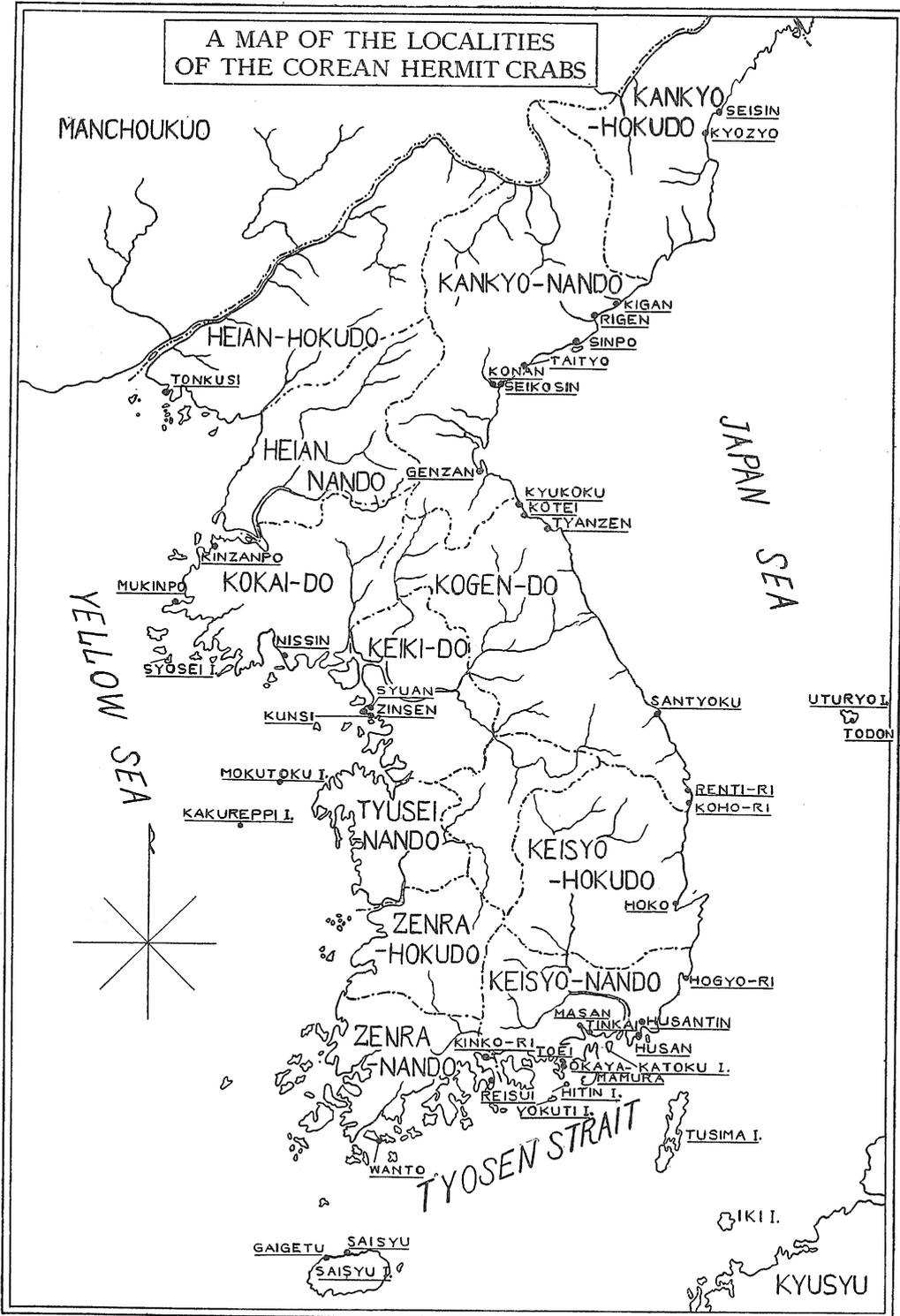
餌としては、タイの1本釣漁業に最も多く使われ、またタイの延縄にも使用される。その他スズキ・グチ(イシモチ)・ニベなどの餌にも、エビの代用として、エビの少い7~9月の間に使われる。体色は蒼灰色・淡赤色・青色を帯び、青色は餌料に適しないという。欲知島では1匹が2銭ぐらいで売っていたが、前述餌料調査によれば、(大正7年ごろは)サパール1杯が慶南では2~4銭、全南では3~4銭、全北では10~13銭、忠南では5~12銭であつた。サパールに1杯には30~40匹はいるが、京畿道では1匹が1厘、平南でも同値であつた。なお、蓄養法として同書の紹介によれば、慶南漆川島蜂谷村では、古船を海中に浮べてこれに海水をたたえ、またはダンベと称する生簀に入れて蓄養する。ダンベの形状はいろいろであるが、最も簡単なのは、ビール箱または煙草箱の上面に入口を設け、側面に径3分内外の小孔を無数に穿つて作つたものである。ダンベにつけておいても、僅々2昼夜の後には5~6割の死虫が出るという。生時♀は抱卵と共に青色を帯び♂は、淡赤色である。

### 朝鮮のヤドカリ類採集地名

地名のローマ字書きと漢字書きの対照表

(旧来の、日本人の慣用的な呼び方による)

Gaigetu 涯月, Genzan 元山, Heian-nandô 平安南道, Heian-hokudô 平安北道, Hôgyori 方魚里, Hokô 浦項, Husan 釜山, Husantin 釜山鎮, Kakureppi I. 格列飛島, Kankyô-hokudô 咸鏡北道, Kankyô-nandô 咸鏡南道, Katoku I. 加徳島, Keiki-dô 京畿道, Keisyô-hokudô 慶尚北道, Keisyô-nandô 慶尚南道, Kigan 奇巖, Kinko-ri 金湖里, Kinzanpo 金山浦, Kôgen-dô 江原道, Kôho 厚浦, Kôkai-dô 黄海道, Kônán 興南, Kotei 庫底, Kunsi



Text-fig. 47.

朝鮮のヤドカリ類採集地図

君子, Kyôzyô 鏡城, Kyûkoku 歙谷, Masan 馬山, Mokutoku-tô I. 木徳島, Mukinpo 夢金浦, Nissin 日新, Okayama-mura 岡山村, Reisui 麗水, Renti-ri 蓮池里, Rigen 利原, Saisyû 濟州, Saisyû I. 濟州島, Santyoku 三陟, Seikosin 西湖津, Seisin 清津, Sinpo 新浦, Syôsei I. 小青島, Syuan 朱安, Taityô 退潮, Tinkai 鎮海, Tôdon 道洞, Tôei 統營, Tonkusi 登串, Tyûsei-nandô 忠清南道, Utsuryô I. 麟陵島, Wantô 莞島, Yokuti I. 欲知島, Zenra-hokudô 全羅北道, Zenra-nadô 全羅南道, Zinsen 仁川。

### 引用文献

- 地理的分布を論ずるに引用した、諸家の文献はすでに紹介したものと重複するので省略する。
- 朝鮮水産組合（釜山）1918（大正7）：餌料調査報告。朝鮮水産組合報付録。
- 朝鮮総督府 1912（明治45）：タラバ蟹に関する調査。総督府月報第二卷七号。
- 1912（大正1）：タラバ蟹に関する調査。総督府月報第二卷十号。
- 朝鮮総督府情報課 1944（昭和19）：漁業制限の緩和。通報第七十四号。
- TERAO, A. & KIMURA, M. 1952（昭和27）：Note on fishery biology of the Japan Sea, with special reference to the catch of Decapod Crustaceans, *Panulirus* and *Paralithodes*. 日本海区水産研究所創立三周年記念論文集（石川県七尾）。